

JELLA NEWS

ジェラニュース 第7号 2005年 8月1日発行 発行責任者 ローウェル・グリテベック

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援 ・ アジア子ども支援 ・ ブラジル子ども支援 ・ ボランティア派遣 ・ 奨学金制度 ・ 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節

第2回世界の子ども支援チャリティコンサート開催
— テッパーさん、今年もありがとう —

Siegfried & Christer
Tepper



東京ルーテルセンター教会



博多教会



神水教会

5月13日(金)から22日(日)にかけて全国8箇所、今年もテッパー親子のヴァイオリンとピアノによるコンサート(JELC世界宣教委員会との共催)を開催しました。今回は、東京ルーテルセンター教会(日本ルーテル教団)をかわぎりに、栄光教会・藤枝礼拝所、大阪教会、京都教会、広島教会、博多教会、神水教会と巡演し、東京の本郷教会でフィナーレを迎えました。8会場合計の来場者は約850名(昨年も8回の開催で、来場者数は530名

あまり)、献金総額は約110万円(昨年は85万円)でした。藤枝礼拝所では用意された数十の補助席が全部うまりましたし、本郷教会は立ち見のかたもいたようです。最高の来場者があった博多教会では、200名を越える聴衆が2階席まであふれんばかりでした。こうして、いずれの会場も素晴らしい熱気と興奮のうちに情熱的な演奏がくりひろげられたのでした。

この号にはこんな記事が

テッパーさんのコンサートに参加して(来場者の声)コンサートこぼれ話	2
難民支援「見えない」難民申請者」とその法的地位(難波満)	3
JELLAの新しいプログラム『祈りのためて琴:リラ・プレカリア』4~5 盛況だったハーブコンサートと講演会	5
ボランティア派遣 インド/与えられ続けた2か月(福田光利)	6
インド洋津波被災地/教会、そして被災地に導かれて(松尾琴)	6
米国グループ・ワークキャンプ/神様が与えてくださった素晴らしい祝福(デビッド・バーソン)	7
大学合格の難民に入学金を支援 賛助会員制度へのご協力をお願い	8
献金者一覧	8
編集後記	8

テッパーさんのコンサートに参加して

赤木泰徳(熊本市)

先日友人に誘われ、神水教会で行われたテッパー親子のチャリティコンサートに参加しました。日頃接する機会のない教会と、ヴァイオリンとピアノということで、妻と3歳になる息子と3人で出かけ、教会の入口で受付の方に温かく迎えられ、腰を下ろし、しばらくするとすぐ落ち着き、おだやかな気分になりました。息子はというと、初めて見るステンドグラスやグランドピアノがめずらしいのか、教会中を走りまわっていました。テッパー親子の演奏は素晴らしく、和やかな雰囲気の中で進められました。息子はヴァイオリンが気に入る、演奏が終わる度に大拍手を送って、大喜びでした。翌朝、息子はヴァイオリンを弾きたいとはしゃいでいました。私たち3人の初めての教会とコンサートは、素敵な経験となりました。

池崎幸雄(熊本市)

5月21日に神水教会で、テッパー親子によるチャリティコンサートに参加させていただきました。息の合った親子のアンサンブルに聞き惚れ、とても感動いたしました。この演奏会の数日前、アルゼンチンの幼い少女(14歳だったと思います)の悲惨な路上生活のドキュメンタリー番組を観て、その子が言った「命を掛けてこの子(自分が12歳で産んだ、現在2歳の子ども)を育てます。私は7歳で両親に捨てられ悲惨な生活をおくってきています。この子には私の歩んだ道は歩かせない」という言葉と、必死に生きている姿が忘れられません。このようなことを考えている時に、世界の悲惨な生活をしている子供達を救うチャリティコンサートに参加できたことを神さまに感謝いたします。この活動が今後永く続き、ひとりでも多くの子供達を救うルーテル教会の発展を願います。

*注:池崎さんは、本コンサートの協賛団体の一つ、リフォームイケの代表をされており、熊本にあるJELAの宣教師館の修繕等でお世話になっています。

大柴節子(藤枝市)

5月14日夜のテッパーさん親子のコンサートは本当に素晴らしかったです。演奏してくださった方の情熱が常に主につながったものであると心から感謝しました。

後藤佳代子(東京)

シーグフリード・テッパー様、クリスター・テッパー様。こんにちは。

私は、母と一緒に、5月22日の本郷教会でのコンサートに行きました。母も大変喜んでおりました。演奏や音の素晴らしさはもちろんのことですが、それプラス、テッパーさんお二人が、ずっと楽しそうに演奏していらっしゃる姿がすごく温かく感じられ、その楽しさが伝わり、「一緒に楽しい気持ち」になることができました。チャリティのメッセージも、決して押しつけでなく、画面がわかりやすくスマートで、「ごく自然な優しい気持ち」で献金ができました。音・視覚・メッセージ。どれも素晴らしかったです。ぜひ、また、コンサートを開いてくださいませ。ありがとうございます。

関本憲宏(東京)

2時間近く立ったままのコンサート、とても感動しました。体全体での演奏は、飢えや病気に苦しむ世界の子供達のスライドもいっそう理解できるものとなりました。自分たちの問題がとても小さなものに見えました。

森部聡子(福岡市)

博多教会で行われたテッパー親子のコンサート、とても素敵でした。次の機会があるように。その時は沢山の友人を誘いたいと思います。献金を追加します。

コンサートおぼれ話

○ 幻のテッパー作品

昨年と異なるプログラムが好評でした。前半はルクレー、モーツァルト、ベートーヴェンといった本格的クラシック、後半はパガニーニ、サラサーテ、クライスラー等の小品を中心に、映画『スティンク』で有名なラグタイムミュージックをとり



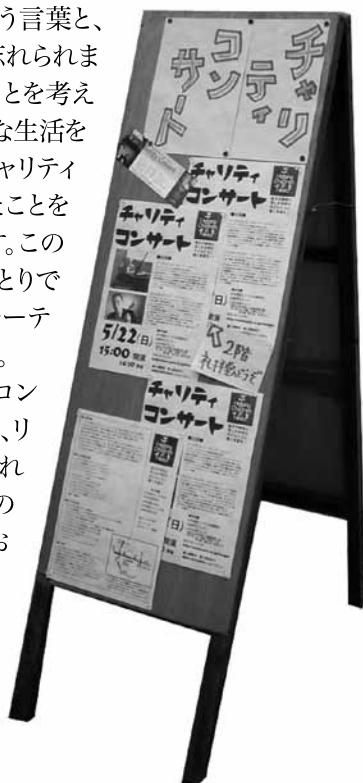
あげるなど、バラエティにとんだ選曲でした。父親のシーグフリードさんがクリスターさんに捧げた自作曲「ヴァイオリンとピアノのための情景No.2」も聴きものでした。とても繊細で綺麗な曲です。どうして1番は弾かないのか尋ねたところ、「息子が気に入らないんだ」とのこと。ところが、ある会場でのリハーサル中に、「あなたの司会に感謝をこめて、特別に1番を聴かせてあげよう」ということになりました。特別に扱われて嬉しかったのですが、今回の選曲は2番で正解だったと、聞かせてもらった後に正直な感想を伝えたところ、あまり嬉しくなかったようです。ごめんなさい。

○ 新幹線の名前

クリスターさんは鉄道ファンで、日本の車両にも興味津々です。広島駅のホームで新幹線を待っているとき、電車の名前の話になりました。自分たちが乗る新幹線のことを知りたかったので、「ひかり」と告げたところ、「それより速いのは」ときたので、「のぞみ」と答えました。少し考えていた彼は、「JRはクリスチャンの会社ですか?」と意外なことを聞いてきました。たしかに「(世の)ひかり」「希望(のぞみ)」という聖書の言葉が車名に使われています。「信仰」や「愛」も登場するなら、まったく根拠のないことでもないと話しているところに、博多行きの「ひかり」が入ってきたのでした。

○ ゆずる心の美しさ

コンサートの途中に抽選でテッパー親子のCDをプレゼントするコーナーが今年も好評でした。二つの会場で、当選者の方がそれを子どもにゆずるシーンが印象的でした。神水教会の最前列で静かに演奏を聴いていた男の子、本郷教会で開演前に「CD、あたらないかな」とかわいい声で言っていた小さな女の子に、それぞれ当選した大人の方がゆずっていました。もらった両人もとても嬉しそうで、心温まる光景でした。CDにはコンサートで演奏されたうちの4曲が含まれています。今ごろ二人は、コンサートのことを思い出しながら耳を傾けていることでしょう。



難民支援

出入国管理及び難民認定法の一部が昨年改正され、今年の5月から施行されています。今回は弁護士の難波満氏に、難民申請者をとりまく法的状況と問題点について解説していただきます。

「見えない難民申請者」と

その法的地位

全国難民弁護士連絡会議

弁護士 難波 満



グローバル化・情報化が高度に進行した今日、私たちのもとには、世界中から難民の映像が日々送信されています^{註1}。しかし、日本では、毎

年数百人に上る難民申請がされているものの^{註2}、これらの難民申請者は、一部で報道される場合を除いて、一般からは見えな

い存在となっています。この背景としては、難民申請者が、本国で迫害を受けるおそれがあると主張しているため、難民申請をしていることを一般に公にはできないという事情もありますが、他方で、日本では、難民申請者が非常に困難な状況に置かれているという事情もあるものと思われ

ます。本稿においては、上記の難民申請者が置かれた状況のうち、その法的地位における困難さについて、私が経験した具体的な事例をご紹介しますながら、日本国内の難民申請者が一般からは見えなくなっていること

の背景とともに考えてみたいと思います^{註3}。昨年

の前半のこと、事務所

にいた私のところに、突然、警察署から電話が架かってきました。その内容は、私が申請支援をしていたある男性の難民申請者を

車で職務質問したが、真正な旅券を持たずに日本に上陸したことが判明したことから、現行犯逮捕したというものでした。私は、直ちに警察署に赴き、その男性は難民申請者であり、自ら入管にも出頭してい

として、釈放を求めたのですが、難民申請をしていたとしても、真正な旅券を持たずに上陸した以上、入管法違反で摘発することに変わりはないという回答でした。その後、その男性は、勾留を経て入管法違反で起訴され、執行猶予判決を受けたものの、引き続き退去強制手続が開始されて入管に収容され、難民と認めない処分・退去強制の命令を受けて失意のまま日本から出国して

いきました。難民申請者は、本国での迫害から逃れるために、真正でない旅券で出国せざるを得ない者も多く、他方、在留資格を取得して日本に上陸できたとしても、難民申請が可能になるまでの間、在留期間が経過してしまう者も少なくありません。そうすると、真に本国で迫害のおそれのある難民申請者であったとしても、真正な旅券を持たずに上陸したり、在留資格を経過してしまったりしているとして、入管法違反を理由に摘発されてしまうおそれがあることになり

ます。従前は、仮に真正な旅券を持たずに日本に上陸したとしても、自ら入管に出頭して難民申請をしていけば、必ずしも逮捕までされることはなかったようですが、不法滞在者に対する摘発を強化する近時の日本の傾向を受け、厳格な運用に変更されたようでした。このように、難民申請者の法的地位が困難であるということの意味は、それが、庇護を求めた国の出入国管理体制や、その国の政治・社会情勢の変化によって容易に不利益を受けるということにあり、日本においては、他国に比べて残念ながらそれが顕著である

ということができます。もともと、今回の入管法の改正により、難民申請中の者が在留資格を有しない場合、その法的地位の安定化を図るため、一定の要件のもとに仮滞在を許可する制度が創設され、これを受けた者については退去強制手続を停止し、難民認定手続を先行して行うことになりました^{註4}。これにより、真正な旅券を持たずに上陸したり、在留資格を経過してしまったりした難民申請者であったとしても、仮滞在許可を受けることができれば、難民申請中に摘発を受けることはなくなるものと考えられます。

しかし、日本に上陸した日から6か月を経過した後に難民申請をした者に対しては、「やむを得ない事情」がない限り、仮滞在の許可が与えられないなど、その要件は厳しいものであり、仮滞在が不許可とされた難民申請者については、従前と同様の不安定な法的地位に置かれるおそれがあります。翻ってみるに、難民申請をしていたとしても、在留資格を有していなければ、入管法違反で摘発するという運用に変更された背景には、不法滞在者が外国人犯罪の温床になっているというイメージが一般に流布されるようになったことを挙げることができると思われ

ます。しかし、実際には、不法滞在者のうち犯罪を行ってしまう者は全体のごく一部にすぎず^{註5}、不法滞在者が一般に外国人犯罪の温床になっているというイメージには、必ずしも客観的な根拠がないものと考えられます。難民申請者は、本国での迫害から逃れてきたという特別な事情があるとしても、日本で外国人として生活をして行かざるを得ないことからすれば、日本に滞在する外国人に対して一般に抱かれている意識は、そのまま日本における難民申請者の地位に影響を与えることとなります。そうとすれば、日本における難民申請者の置かれた困難な状況を真に改善するためには、私たちが日本に滞在する外国人一般に対して抱いているイメージを偏りのないものとする

必要があると思われ

ます。JELAハウスを始めとするJELAの難民支援の活動は、単に難民申請者の生活を支援するにとどまらず、このようなイメージの偏りを払拭するものとしても、重要な意義を有しているのではないかと考えられます。

注1] この原稿を執筆している現時点でも、ウズベキスタン東部で発生した騒乱事件を契機として、隣国のキルギスに多数の難民が流入しており、UNHCRが強制送還を懸念しているという報道がされている。(http://www.asahi.com/international/update/0521/001.html)

注2] 2004年には36か国から426人が難民申請を行っている。(http://www.moj.go.jp/PRESS/050224-1/050224-1.html)

注3] なお、難民申請者が置かれた困難な状況のうち、その生活面における困難については、難民事業本部(RHQ)による保護費の支給等の事業が実施されているほか、JELA等のNGOや個人による献身的な努力に依存している状況にあり、公的支援の拡大の必要性が強く望まれるところである。

注4] 平成16年6月2日法律第73号による改正後の入管法61条の2の4、61条の2の6、仮滞在許可制度の創設を含む新しい難民認定制度は本年5月16日から施行されている。

注5] 2003(平成15)年度の不法滞在者数は全体で約22万人と推計されているが、同年度の不法滞在者の刑法犯全体の検挙人員は1520人であり、その日本人・正規滞在者を含む刑法犯全体に占める比率も0.4パーセントにすぎない。



JELAは2006年4月から、病で苦しんでいる人や死にゆく人にハーブと歌声で安らぎと慰めを与える奉仕者を養成するプログラム『祈りのたて琴:リラ・プレカリア』を開講します。

祈りのたて琴(リラ・プレカリア Lyra Precaria)は、健康上の、あるいは心の問題で悩み苦しむ方々を慰めるために、ハーブと歌による生きた祈りを捧げることを意味します。病床で、あるいは悲嘆する人々のかたわらで生きた祈りを奏で、苦痛を共有し、心がなぐさめられるように奉仕する働きです。



リラ・プレカリア研修講座

2006年4月に開講するリラ・プレカリア研修講座は、18ヶ月間のボランティア養成プログラムです。この期間、受講生は各々の祈りの生活を深めながらハーブと歌の技術指導を受け、さまざまな問題で悩み苦しむ方々へ生きた祈りをお届けする奉仕の訓練を受けます。ルーテル学院大学付属・人間成長とカウンセリング研究所が提供するカウンセリング講座を受講することにより、アクティヴ・リスニング(傾聴)の能力も高めます。

この研修講座の受講生は、週2日の授業の他に、ホームワークとして毎日最低3時間、祈りと音楽の訓練を行います。後半では、習得した技術による生きた祈りを、ホスピスや病院等の病床で実習する機会もあります。

リラ・プレカリア研修講座は、ハーブにふれたことのない全くの初心者でも受講可能です。



社会への奉仕

社会への奉仕こそ「祈りのたて琴」プログラムの中心です。リラ・プレカリア研修講座の修了者は、ホスピスや終末ケア施設の病床にある方々、また健康上の、あるいは心の問題で苦しむ方々の傍らで習得したハーブと歌による生きた祈りを捧げ、人々の苦痛を共有し、心がなぐさめられるように願って奉仕します。

キリストは、互いに顔を向け合う愛に満ちた社会へ、とりわけこの世の中で悩み苦しむ人々のもとへと私たちを招きます。助けを必要とする人々の中にキリストは存在するからです。

音楽には言葉ではなし得ない力があります。神様の愛で人々の心に触れる力です。

「祈りのたて琴」の働きを受ける人々に経済的負担は一切なく、完全な社会奉仕活動です。JELAは、ハーブと歌による生きた祈りの派遣を希望する人たちと、リラ・プレカリア研修講座修了者との間のコーディネーターとしての役割を担います。

社会への教育活動

ハーブと歌による生きた祈りの働きの意義は、まだ日本では十分に知られていません。キリスト教関係者にとどまらず、一般社会から幅広いご理解とご支援が得られるよう、JELAは今後、講演会、コンサート、文書活動等により、積極的にPR活動を展開します。





私は 2003 年 12 月に財団法人ライフ・プランニング・センター主催で行われた「祈りと音楽」の集いの中で、日本福音ルーテル社団に籍を置かれる Carol Sack 宣教師によるハーブの演奏と歌のコンサートのプログラムを持ち

ました。

私は日本音楽療法学会の会長職を務め、日本において癒しの音楽による音楽療法の普及を計るとともに、国家による音楽療法士の身分法の法律を作るための努力をしています。

音楽は病む人間への癒しだけでなく、健やかな人の心をも支え、生きるエネルギーを高める大切な役割を演じるものと思っています。音楽療法の用いる楽器のうちハーブの響きは心に静かに迫り、不安や悲しみを和め、生きる力を静かに高める不思議な力を私達に伝えるものと信じます。

日本福音ルーテル社団のこの方面の活動が日本の諸層の人々に広がることを私は期待するものであります。

聖路加国際病院理事長

(財)ライフ・プランニング・センター理事長

日野原 重明



キャロル・サックさんが「ハーブと歌で看取りをしたい」と山谷のホスピスケア施設「きぼうのいえ」にいらっしやったのは 2003 年の春でした。

終末の病床にある方の側でキャロルさんは

ハーブを演奏し、静かに歌いながらしばらくの時間をその方と共有しました。何かを押し付けるのではなく、そっと寄り添う感性はホスピスケアにとって大切なことだと思います。

キャロルさんはこれまでここに住む 10 人以上の方にハーブと歌の看取りのケアをしてくださいました。「これが成功したかは、お相手が眠ったかどうかでわかります。」この言葉がこのセッションの真髄を伝えていると思います。

日本福音ルーテル社団が推進する「祈りのたて琴」プログラムによって、皆様が人との交わりについて多くのことを得られますよう心から願い、祈っています。

きぼうのいえ施設長

山本雅基

言葉がなくても祈れるように 神様は音楽を下さった



「ダビデは琴を取り、手でそれをひくと、サウルは気が静まり、良くなった。」サムエル記上 16 章 23 節

盛況だったハーブコンサートと講演会

『祈りのたて琴：リラ・ブレカリア』を知っていただくために、5 月下旬に米国のハーブセラピスト、クリスティーナ・トゥーリンさんをお招きし、講演会とチャリティコンサートを開催しました。トゥーリンさんは、このプログラムのコーディネータであるキャロル・サック姉が病院やホスピスでのハーブ演奏の実践について米国留学時代に学んだ教師の一人で、多数の CD や著作を発表しているかたです。

講演会は 5 月 28 日 (土) 午前 10 時から東京・恵比寿のジェラ・ミッションセンターで開催され、とおく神戸から参加された方を含め 70 名以上の出席がありました。ハーブの音階の特徴や分類、それぞれがかもし出す雰囲気や気分等について音色を実際に響かせながら解説され、ホスピスや病院での実践についても、スライドをまじえてわかりやすく説明がなされました。講演の後に十分な質疑応答時間がとられ、充実した 1 時間半となりました。

昼食後のチャリティコンサートは 100 名を超える来場者で満席のなか、アイルランド、ケルト、スカンジナビア等の珍しい曲やトゥーリンさんの自作曲

メドレーが静かにやさしく奏でられ、会場をなごやかな雰囲気包みました。後半では、演奏者の近くに置いてあった 2 台の小型ハーブの前にハーブ初心者の聴衆が招かれ、トゥーリンさんと一緒に日本の民謡やわらべ歌を合奏する楽しいシーンがありました。コンサート終了後も自由にハーブに触れてよいなど、非常にくつろいだ催しでした。おおぜいのかたに楽しんでいただけたと思います。翌日も同様のコンサートが聖路加国際病院礼拝堂に場所を移して行われ、こちらも病院の患者さんを含めて約 100 人の出席がありました。両コンサートの収益は、日野原重明先生が理事長をされている財団法人ライフ・プランニング・センター関連のホスピス「ピースハウス」と、キャロル・サック姉がハーブと歌声による看取りのケアの奉仕をしている東京・山谷の施設「きぼうのいえ」に捧げられます。

『祈りのたて琴：リラ・ブレカリア』の講座内容等に興味をお持ちの方は、JELA 事務室までお問い合わせください。

ボランティア派遣

India

インドボランティアの福田光利さんが4月下旬に無事帰国されました。皆さんのお祈りを感謝します。喜びのレポートをお読みください。

与えられ続けた2ヶ月

福田光利(八王子教会)

私はインドでもっとも貧しい地域の一つ、ジャムケッドにあるCRHP(総合的地域保健プロジェクト)が運営する施設にボランティアとして2ヶ月派遣されました。最初の一週間は、JELAと日本福音ルーテル教会がこの地域で初めて実施する義足づくりワークキャンプに、日本から派遣された9人の仲間と共に参加しました。私はこのキャンプの間に、これからの2ヶ月、ボランティアとしてインドで何をするか見つけようと思っていました。何も見つからないまま2ヶ月過ぎてしまうのではないかと大きな不安がボランティア申し込みの時点からあり、出発前に何度もJELAの森川さん、グリテバックさんに相談し、力づけられていました。応募はしたものの、私はまったく自信がなかったのです。

しかし、インドに到着してからの3日間で不安が吹き飛びました。CRHPにすっかり魅了されてしまったのです。そして、CRHPの日本語版ホームページがないことを知り、それを作ろうと情報集めに奔走しました。CRHPは、貧しい地域と一体となり村人の自主的な参加を得ながら、人々の健康を保ち医療を改善してゆくプロジェクトです。ジェムケッドに関する本を読み、現地のスタッフやヘルスワーカーをしている村の女性に話を聞いたりしていくうちに、私はCRHPのことをもっとも知りたいという欲求に駆られ走り出していました。プログラム全体の責任者であるショーバ博士にも話を聞き、いろいろな村を訪ね、施設から車で6時間もかかる山の中へと出かけていき、農場を訪ね、サブセンターの活動を知るためにその責任者の自宅に泊ってもらい、またそこからいくつも村を訪ね歩きました。CRHPの職員をはじめ、村の人々の生き生きとした

インド

姿に接し、私はいつも受身で生きてきた自分を小さく感じました。ある村の男性は言いました。「私たちの村はこの地方で最優秀賞を受賞したんだ。さあ、見てくれ！私たちはまだまだこの村を変え、もっと素晴らしいものにしていくよ。」

私は取材や調査によって情報を得る一方、それとは比較にならないほど、CRHPが行っているキリストの愛の奇跡を見せつけられ、それが次から次へと私の中に送り込まれるのを感じました。ボランティアに来たというのに、与えるどころか与えられ続けたのです。CRHPの創立者であるアロレ博士と妻メイベルさん(故人)の「苦しむ人々へキリスト信仰に基づく愛と救いを提供する情熱」が私のジャムケッド体験を希有なものにしました。

今、私ができること、それは私が変わることだと気づきました。何もできないとずっとしり込みしていた私は、彼らの行動にどれだけ力づけられたことでしょうか。ここで経験のすべてが神様の導きであったと確信し、喜びに満ちた2ヶ月間に心から感謝いたします。

*注:福田さん他が作成したCRHPのホームページについては、<http://sky.zero.ad.jp/nekogen/ajamkhedhome.htm>を参照。インドでのボランティアやワークキャンプに興味のある方には有益な情報が多数掲載されています。なお、このサイトは現在のところJELAの公式ホームページの一部ではないため、内容に関する質問等は福田さんをお願いします。



Thailand

昨年12月26日に起きたスマトラ沖地震・インド洋津波被災地を支援するため、今年の2月にJELAとJELCは10名のボランティアをタイのカオラックに派遣しました。そして、その中の二人がこの経験をとおして主を受け入れました。以下はその一人、松尾琴さんのレポートです。

教会、そして被災地に導かれて…

松尾 琴(岡山教会)

何年ぶりだったのだろう。私が自分の意思で教会を訪れたのは……。

神様なんか本当にいるのだろうか？両親がクリスチャンだからといって私もクリスチャンになる必要はない。私は神様に頼らなくても生きていける。そう考えていた中学・高校時代。しかし、そんな私も悩みができるとよく母に相談した。すると母は母なりの答えはくれるものの、決まって最後には「今晚、神様にお祈りしてごらん？」と付け加えた。その事に、当時の私は苛立ちを覚えていた。

月日は流れ、私は今春大学を卒業した。正直、去年は今までにないくらい人間関係に悩んだ年だった。私のクラスは、仲がよさそうに見えても、本人のいない所では悪態をついていたり、ある子が真剣な話をしていても陰で笑い話にしていたり、と愕然とするものがあつた。

「言いたい事があるなら直接言えば？」我慢が出来なくなってそう言った私に矛先は向けられた。ある事ない事言われ続け、私は学校に必要最低限しか行かなくなった。体が重くてだるくて家では一日中寝ていた。何を基準に生きていけばよいのかわからなくなっていた。そんな折、妹が遊びに来たので悩みを打ち明けると、彼女は黙って聞いてくれていたが最後に一言「私に聞くより神様にお祈りした方がいいと思うよ?」と言った。私はひどく衝撃を受けた。母のように、私より人生経験の豊富な人が言う言葉は時に綺麗事に聞こえ聞き流してしまうことがある。しかし、同年代や年下の人に言われるとひどく心を揺さぶられる事がある。妹の言葉は正にそんな意味をもっていた。

私はその晩、久しぶりにお祈りをし、教会も探して行き始めた。教会は温かかつ

た。帰り際、一枚のポスターが目にとまった。タイへのボランティアを募るものだった。そして2月28日、私はタイ行きの飛行機に乗っていた。

帰ってきた今、私は行ってよかったと心から思える。それは、現地で有意義な時間が過ごせたからだけでなく、初めてクリスチャンへの道を意識するような出来事にも出会えたから。メンバーの中で、未受洗者は私の他にもう一人おられたが、その方が現地で受洗され、洗礼式に参列していた私は気付いたら感極まって泣いていた。神様と出会われて良かったなあと涙が出てきた。ふと、我に返りそんな自分に驚いた。あれほど神様を否定していた筈が、実は既に受け入れていた事にその時初めて気付かされた。見せかけの幸せではなく、神様に愛されているという実感が心広く毎日を過ごさせてくれるような気がした。

帰国後私は受洗し、その事をカナダで暮らし始めた妹にも伝えた。「神様と共に歩む道はとても快適です。何か困った時、神様に聞けばもれなく答えを下さるし、苦しい道も簡単に歩めるようにして下さるし、苦難以上に幸せを沢山与えて下さる方だと私は日々感じています。」と、返事があった。

今の私ならこの言葉をそのまま受け取れる気がする。



7月26日から8月9日まで、ミシガン州のキャンプに15名の青少年と4名の引率を派遣します。米国のグループ・ワークキャンプ財団が主催するこのキャンプは、高齢一人暮らしの方や貧困家庭の家屋修繕奉仕と賛美集会を結びつけた超教派の催しです。30年近い歴史があり、日本からの派遣は今年で5年目をむかえます。ジェラニユース掲載の参加者レポートをお読みになったことがあるかと思えます。じつは、2002年に引率として参加されたデビッド・パーソン牧師も長いレポートを書いてくださったのですが、今までみなさんに披露する機会がありませんでした。最近それを読み返してみ、キャンプの様子と意義が生き生きと描写された素晴らしい報告であることを再認識し、遅ればせながらここにその全文(英語の原文を編集部が和訳したものを)に掲載することにしました。これを読みながら、今年のキャンプのことを覚え、お祈りいただければ幸いです。本年度参加者のレポートは、次号(11月下旬発行予定)に掲載します。

神様が与えてくださった 素晴らしい祝福

デビッド・パーソン(市ヶ谷教会)

日曜の午後にキャンプの幕があき、作業が始まった月曜日の時点で、日本人参加者は不安にかられ自信を喪失しているようでした。英語だけの環境に放り込まれて心細かったでしょうし、相手の指示がよくわからぬまま昼食の準備や家屋の修繕に取り組むのは、ストレスのたまることだけに違いありません。日本から応援に来たというより邪魔になっているように感じられ、自分たちがいないほうが仕事かよかどと思えたかもしれません。涙で落ち込んだつらいスタートでした。

その翌日か二日後、一人のアメリカ人キャンパー(*キャンプ参加者)が学校の食堂で泣いていました。それを見た日本人グループの一人が彼女に近づき、抱きしめました。言葉のない抱擁でしたが、その行為は言葉以上のものを語っていました。日本からの参加者は、サッカーや相撲、踊りをするなどで、あるいは古いペンキを剥がしたり、ハンマーをたたいたり、家やクルー(*家の修繕奉仕をする仲間)の顔にペンキを塗ったり、そこらじゅうに「愛」「神様」という漢字を書くという行為をおして意思疎通をはかりました。すぐにアメリカ人キャンパーたちの頬、額、腕、脚に「神様」「愛」の文字がたくさん見られ、新しい形の素晴らしいコミュニケーションが成り立ちました。それを目の当たりにした私は、たしかに神様の霊がその場を支配なさっていると思いました。

ある日、仕事を終えた日本人キャンパーが食堂で休んでいると、近藤茉莉さんのクルーの一員であ

グレンさんがやってきて、自分の言うことを通訳してほしいと私に頼みました。グレンさんは現役を引退した年配の男性です。彼は茉莉さんにむかって語り出しました。「私は45歳でクリスチャンになったのですが、それまでは何も信じずに生きていました。幼いときに起こった第二次世界大戦で二人のおじが日本人と戦い、二人とも殺されました。それからというもの、日本と日本人に対して憎しみを持ちつづけてきたのです。でも、このキャンプで日本人である茉莉さんといっしょに働きながら、憎しみを抱きつづけるのはいけないことだと気づきました。いま私は和解を必要としています。私は日本と日本人を許す決心をしました。どうか、私のことも許してください。」こう言い残して、彼は立ち去りました。私たちは釘付けになったように押し黙り、その場に座っていました。聖霊様は私たちの理解と想像を超えて働くお方です。この瞬間、グレンさんも私達も神様の祝福の中にいました。

水曜の夜のバラエティショーで、日本人グループは全員で“Shout to the Lord!”(叫べ全地よ)を日本語で歌いました。時間をかけて練習したのではなく、ご愛嬌程度の歌でした。でも、私たちが歌ったあと多くのキャンパーがやって来て、この歌を日本語で聞いた喜びを伝えてくれました。また、世界を半周するほど遠くにあるサウスダコタのMartyまで、日本の若者が人を助けるためにやってきたことに感動した、と言った男の子がいました。この事実は彼に力を与え、彼自身の信仰を強めたということです。木曜の夜のプログラムの後、若いアメリカ人キャンパーが目には涙をいっぱいためながら私に近づき、日本からこの青年たちを連れてきてくれてありがとう、と言いました。そして、日本人グループが自分にとってどれほどの祝福となっているか教えてくれました。別の子は、来年私たちがどのキャンプに参加するのか知りたがりました。それがどこのどのキャンプであっても、そのキャンプ地にたどり着くためにアメリカ大陸を横断しなければならなくても、日本人が参加するキャンプに参加したい、と彼は言いました。同じような話を私は何人もアメリカ人キャンパーから聞いています。

私たちは神様の御名によってサウスダコタ州のMartyまで旅をしました。そして、神様は私たちが当初いだいた不安や自信喪失の思いを、私達と米国人参加者のために、想像もできない形で祝福へと変えてくださいました。この素晴らしい体験を与えてくださった神様に感謝し、その御名前を心からほめたたえます。

大学合格の難民に入学金を支援

この3月にアフガン難民の男性が神奈川大学に合格しました(写真の東京新聞の記事参照)。

ご存知のようにJELAには奨学金制度があり、国際交流に役立つ目的の学問修得や研修を支えています。

賛助会員制度へのご協力をお願い

JELAは、監督官庁が提唱する公益法人指導監督基準のつとりに、昨年、定款の一部を変更し、賛助会員制度を設置しました。

賛助会員制度はJELAの公益法人としての組織基盤を強固にし、その活動をより充実・発展させるための制度です。

- 赤間峰子/明比輝代彦/阿部晴夫/安達幸詔/尼嶋治/阿波田絹子/飯島早苗/飯野タケ/池田高雄/石田浩子/泉洋子/伊東節子/今井哲男/今村美美子/岩崎高紀/岩間雪子/岩本保子/ヴァンデルタンク・エリ子/宇五十鈴/埜淑代/江崎啓子/江澤妙子/大柴節子/大谷忠雄・妙子/荻窪邦昭/乙守ミチ子/柿沢純江/榎木芳昭/明子/柏原利/勝原洋子/加藤美枝子/兼岩恵美子/上窪松子/木曾勝子/京谷信代/釧路教会/窪田都子/窪田銚子/倉重ミドリ/甲府教会女性会/古財克成/古財悦子/古財久美/小宮俊作/武子/斉藤正恵/佐々木裕子/佐藤玲子/三五康子/斯波健一/芝田美穂子/島宗正見/周田裕芳/白井智枝/白髭市十郎/尻無浜紀美子/鈴木やす/聖望学園/関口佳子/関本憲宏/高橋寿子/高橋悠美子/高橋要子/高橋佳子/滝澤知恵/竹内貞夫/谷口恭教/玉名教会/堤重敏/戸田修司/鳥居和代/中村孝治/敬子/中村雍子/名古屋めぐみ教会/西村鶴子/西山昭子/芳賀明子/橋口保夫/栄子/早瀬康平/原田恵美/日野原万記/兵藤真理子/平林洋子/福田陽子/松嶋俊介/松田美智子/松比平聡夫/松本チグサ/丸山正昭/南節子/南谷なほみ/宮澤真理子/迎恒夫・千栄子/村上裕子/名東教会/森保宏/森田雅子/森部聡子/八坂由貴子/安みぎわ/山県順子/山口実香/山崎恵美子/山田守/山本一男/吉田貞子/ルーテル教会「共に生きる」集い/若原奇美子/渡辺映子/渡辺高伸/渡辺聡/Christ Lutheran Church/Robert Cunningham/Trinity Evangelical Lutheran Church

(2005年3月1日~2005年6月30日、敬称略)



編集後記 『コンパッション-ゆり動かす愛-』(ヘンリー・J・M・ノール他著、石井健吾訳、女子パウロ会、1994年発行)という、靈感に満ち溢れた書物にめぐりあいました。

JELA Japan Evangelical Lutheran Association 日本福音ルーテル社団 日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel. 03-3447-1521 Fax. 03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp